

教育價值としての聖

三 枝 樹 正 道

教育的價值としては諸種の文化價值が擧げらるゝが、それらに互して聖價値は如何なる地位にあるものか、換言すれば、近時宗教々育の語がカナリ多く使用されてゐるが、これに就て教育の原理の上に、其方法の上に、更に又効果の上に、宗教が如何なる役目を演じてゐるかに就て、宗教價値たる『聖』なる價値を通じて、些か考察してみたいと思ふ。従て茲には聖價値と他の文化價値とは、教育的價値として如何なる關係にあるものか、及び聖價値を中心として起る宗教現象と、その他の文化價値を中心として生起する教育現象とは、如何なる關係にあるかの問題に就いて、一考察を施して見たいと思ふ。

—

抑も文化價値は、全教育活動の指導概念であり、一切の教育的發展は、この文化價値への發展である。然し乍ら文化價値は普遍妥當性のものであり、従つて超個人的のものである。故に具體的なる個々人格の陶冶を以て任務させる教育活動に對して、直接に參畫するに非れば直ちにこれを教育價値と云ふことは出來ぬ。即ち總べての文化價値は、その儘では直ちに教育的價値と云ふことは出來ないが、諸種の文化財、殊に教育的財を通じて現實化されて、教育的發展に貢

献することによつて、教育的價值なるものである。更に詳しく云へば、總べての文化價值は、何れも個人の生活現實に貢獻し得て、その生活内容の發展過程にして、實現されゆく時に始めて教育價值、即ち陶冶價值となり得るのである。従つて總べての文化財は、又それ自身が、教育に無關係にある間は、何等の教育的價值も意義も有せないが、所謂教育的なる發展過程に關係するに至つて、始めて陶冶財となるのである。

サテ教育的價值には、その主なるものにして、眞善美利健等を擧げることが出来る。而してこれらの諸價值は各々夫れ々の領域に於て、科學的研究に道德的修養に、藝術的陶冶に、經濟的生活の向上に、健康に貢獻するものである。元より伴隨的には、各々他の領域の陶冶作用にも貢獻するものではあるが、これらの價值は、各自獨立の價值體系を組織することによつて、時には相衝突することがある。又少くも、兩立し難き場合がある。例へば、科學の研究に熱心なる者にして、藝術の鑑賞に無關心であつたり、藝術家にして、道德的生活に違背して平然たる者もある。又健康に恵まれるも、社會的教養の缺如せるものがあつたり等して、一價值は他の價值領域を、拒否乃至は否定さへもすることがある。然るに、教育の理想は現實にある不完全なる状態より、完全なる「あるべき状態」にまで調和的に向上發展せしむるにあることは、ナトルブ始め殆んぎすべての教育學者の認むる所である。而もその途上に於て、右の如き離反關係があるごすれば、教育は不可能に陥らねばならぬ。これは價值自身の持つ、即ち内具する、價值特有の排他性ごまでは云へなくごも少くごも非協同性によるものであるご思ふ。即ち眞理は常に必ずしも善ではない。美は又常に必ずしも健ではない。蓋しこれらの諸價值は、各々独自の價值領域を有するものにして、同一範疇に入れるごは不可能である。然しながら、これらの諸價值は、統一ある個性に於て統攝せられねばならぬ。即ちこれらは何れも協同して人格の陶冶に貢獻して、茲に始めて教育の理想とする、調和せる完全なる姿態への發展に參畫すべきである。換言すれば、これらの

諸價值は、價值自體としては如何にあらうとも、教育作用に於ては即ち人格陶冶に關しては、相互に調和すべき筈のものである。然るに、それにも拘はらず尙ほかくも期待に反して、かゝる結果を誘導する懼れありとすれば、吾人は何處にかその原因を探索せねばならぬ。而してこれが現時常識的にも宗教々育の必要が叫ばれる故以てもあらうと思ふ。私はこれに關して次の如き觀察を下す。即ち上述の總べての價值は、何れも同等の位次に於ける聯立的なる關係にあるものにして、これを統攝する價值を缺如してゐるのである。而して、そのこれを統攝し調和融合せしむる所の、これらの諸價值より一層高次なる價值が無ければならぬ。それが即ち聖價值である。かくて宗教が教育の領域に於ても、實に基礎的に必要な故以を見るのである。

眞善美等の諸價值は、何れも肯定的價值にして、吾人が研究し、鍛練し向上發展し行く過程に於て、漸次發現し來る價值である。然るに聖價值は、これらと全然位次を異にする、寧ろこれらを否定し、否定することによつてこれを揚棄する一層高次なる價值にして、吾人一切の有限的限界を、超克する所に顯現する價值である。佛教に説く涅槃こそ、即ち此聖價值にして、これに到達するに、或は空を説き、或は如來の大悲救済を説くは、何れもこの全的否定的價值を表現せんとするものである。故に涅槃は又解脱なりとも云ふ。所謂空或は大悲救済は、吾人の全生命の絶對的否定を意味するものである。但し、勿論全生命の全的否定と云ふも、それは元より單なる概念上の否定ではなく、さればこゝて、又現實生命の事實上の放棄でもない。即ちこの聖價值は、遂に完全なる説明はなし得ざるが、あらゆる價值の極限に立つ、而も否それ故に、一切の價值を包含統攝し、且つ指導し尙ほその基礎となり得る價值である。所謂空と云ふも勿論無ではない。個々物を否定し盡し、空じ去ることによつて、一切の根柢となり、一切活動の源泉となる價值である。如來の大悲も亦、吾人の一切を投げ出して、否な投げ出すことすらも出來ない自己を眞實に諦觀して、絶對大悲に歸命する所

に、始めて感得させらるゝ世界である。勿論諦める力を自己に有するわけではない、諸種の三昧發得、彌陀の救濟等云はる世界は、何れもこの聖價值實現の世界であるが、これは凡べて現實の肯定的諸價值を、全的に否定し盡す所に顯現するものにして、従つてその故に、何れの價值に對しても、基礎たりうる最高次の基本的の價值である。而してこの聖價值ミ吾人ミの關係の世界を亦信の世界ミ言ふ。即ち信の世界は、自己の主觀を全的に對者に投射し没入する所に、完全に體現せらるゝ世界である。古來よりの高僧の佛に對する態度に於て充分知る事が出来る。此點前述の教育の世界に説き來つた他の諸價值が、肯定的發展的價值であるのミは全然異なる點である。元よりこれは信仰の世界にも、全然努力的要素が無いミ云ふ意味ではない。禪の坐禪默思、別時行儀の念佛の如き、又小消息に於ける念佛勸進の如き、何れも信の世界に於ける精進を説くものであるが、これは純信の世界に至らんミしての努力にして、即ち聖價值への志向道程であり、全否定し得ざる者のまづ第一歩ミして歩むべき過程である、故にこの精進は決して、此念佛の修行が滿行の曉に、三昧發得を約束するものでなく、反つて念佛の増進するにつれて、自己否定増大し、彌陀の大悲救濟の確實なる實感を得るものである。而して大悲救濟の實感の、確實にして強固なる程、更に念佛の業は勵まるゝものである。かの永觀律師の「精進の身ならば何ぞ彌陀を念ぜんや」（往生拾因）ミ云はれし如きは、自己を「罪惡の身」「破戒懈怠の身」ミ、諦觀して始めて起る絶對歸依の姿である。かくて念佛の勵まるゝミは、自己否定の極致に至つて、眞劍の態度ミなる。若しこれを自力の増進ミ考へるならば、それは事の本末を轉倒せるものである。又坐禪にしても、坐禪なる努力修行の集積が、大悟を導くものに非ずして、此修行の一步は修行其物を空ぜんミして行はるゝものである。即ち修行は、主觀の修養であるが、それは主觀を擴充せんミして行はるものではなく、反つて主觀を空ぜんミして行はるものである。而して此主觀を空するミによつて、眞に主觀を擴充するミが出来るのである。この全然文化的價值の判斷

の對象となり得ざる、而も反つてその基礎となり價值的背景となれるものが、聖價値の世界である。

かくて、この聖價値によつて、總べての現實的價値は一大熔爐の中に昇華せられて、悉く融化統合せらるゝのである。この聖價値こそは、生命其自身の對象價値にして、他の諸價値は、この聖價値に基礎づけらるゝことによつて、生命の向上發展、人格の陶冶に貢獻することが出来るのである。即ち聖價値以外の諸文化價値は、生命の屬性たる諸能力の陶冶價値となるものであつて、それは元より必要であり、重要なものであるが、その本質たる生命の發展の上に調和融合せられて、始めて教育的意義を有するに至るのである。若し然らざる場合には、反つて人格の分裂をさへ來す懼れすらある。かゝる意味に於て、教育の基礎に宗教を必要とし、その目標に聖價値を必要とする故以を見るのである。かゝる意味に於て、聖價値が他の教育的諸價値の基礎として、重要な地位を占むる故以を發見するのである。

知識にしても、藝術にしても、道德にしても、これらは凡べて其儘に於ては、各々獨立の價値體系として、必ずしも調和融合を約束するものではないが、聖價値を基礎に置くことに於て、始めて一大綜合文化を構成するものである。

又他の方面より見れば、個性を基礎としてその上に築かれたる文化は、いかにそれが普遍安當なる價値内容によつて充たさるるにも、單なる個性に立脚する以上、終局に於ては眞の融合は將來さるゝものではない。然るに聖價値の領域、即ち宗教の世界に於ては、かゝる個性は空ぜられてゐる。全く如來の大悲の中に抱かれてゐるのであつて、各自はこの無限の大悲、絶對の慈愛の裡に、渾然融和安住させられてゐるのである。即ち宗教の世界に於ては、個性とは、一切の緣起の頂點である。緣起相に於てのみ、始めて個性を見るのである。かくてこそ、宗教の世界を基底に有することによつて、即ち聖價値に照破せらるゝことによつて、諸種の文化は融合せられ、諸價値は調和せらるゝのである。従つて人格として、個人を眞の意味に於て、又生命體として陶冶せんことをするには、宗教を離れてこれを完全することは不可

能である。

二

サテ、次に又教育は、人格によつて人格を陶冶することを以て本質とする。而して人格とは、普遍的なる價值が、個性の中に於て統一融合して實現せしものである。即ち個性の生命體の上に築かるゝ、神格或は佛格の意味である。而も此中心的なる勢力をなすものは、情意的精神である。知的性能は、その外廓をなすものである。身體は、更にその最外周縁をなすものである。故に人格の陶冶は、これらの屬性を通じても行はるゝものであるが、元より主たる任務は、生命の本質的陶冶でなければならぬ。然るに現在の學校に於ける教育にあつては、これらの屬性陶冶に就て、諸文化價值は、多く概念化せられ易いのである。而して凡べて概念化されたる價值は、敢へて人格を通ずる必要を持たないのである。従つて現在學校に於ける教育にあつては、本來も又希望として、人格中心であるべき筈ではあるにも不拘、事實に於ては、人格よりも概念化されたる價值本位の教育が行はれつゝあるのである。尤も情意的價值は、或は鑑賞を通じて或は創作を通じ、或は實踐を通じて、始めて人格内容を構成するものであるが、必ずしも人格を媒介する必要はない。凡そ聖價值は、常にものゝ本質を照破するものである。従つて、教育に際しても、人格そのものゝ陶冶、人間の生命自體の發展を促すものであるが、眞善美等の價值は、或は知、或は情の陶冶をなし、時には没我的精進を促す場合もあるが、それによつて人格そのものゝ陶冶にまでは必然的に進むものゝは斷定し得ない。即ち藝術的創作、科學的發明、發見によつて表現されたる價值は、その價值の關する限りに於て、人を陶冶するものであるが、人格的なる陶冶、生命の本質的擴充を齎すものゝは限らない。例へば、優秀なる藝術品その物は、人をして、その崇高なる雰囲気まで高める

ものであり、特殊の感動をさへ與へるものではあるが、必ずしもかゝる作家の人格は人を感動せしむるものではない。又科學の場合にあつても同様で、發見發明されたる、或は表現されたる眞理は、人をして知的に陶冶を受けしむるが、學者の人格、態度は必ずしも人を陶冶せない。此場合かゝる藝術家、或は學者が人格的に、換言すれば生命の本質上に於て、他人に教育的感化を與へ得たゞすれば、それはその學者藝術家の單なる知的或は情的に優秀なる材能によるものに非ずして、その學者藝術家等の生命の上に、即ち人間としての本質上に優秀なる點が發見さるゝが故である。而してこの本質上の感應こそ、宗教的なる感化である。故に教育上の諸價値は前述の如く必ずしも人格を通ぜずして傳達さるゝものである。

然るに宗教は概念化されては、全然傳承されるものではない。必ず人格を通じて、體現によつて傳達されねばならぬ。即ち法身體は、宗教の原理とはなるが、宗教活動の原動力とはならない。生命ある、生ける宗教としては、常に報身或は應身の人格體を中心として要請するものである。如來も神も、それは現實的宗教としての相異せる立場からは、種々に説明もなし得らるゝが、信仰せらるゝ神佛は常に必ず悉く人格體でなければならぬ。

さて教祖、宗祖、派祖は、その信者に對しては、その人それ自身が聖價値の體現者にして、如來の化身であり神の權化なりとして、尊信せらるゝものである。(即ち宗教の世界に於ては、聖價値は、かゝる教祖宗祖派祖の人格を通じて、即ちその體現を媒介として、他人格へ傳承せられてゆくものである。然るに、他の文化價値は、學問の世界にしても、藝術の世界にしても、道德の世界にしても、學者藝術家、道德家は、必ずしも、眞善美等の價値其物でなく、又體現者でない。即ち學者は、眞理を傳達するものであるが、必ずしも、眞理に合致せる生活を營めるものとは云ひ得ない。藝術家道德家等も同様である。(かく云へば、宗教家にも亦法を説く人であつて、必ずしも眞の宗教人でない者もあるこ

こは、肯定出來ると思ふ。従つて宗教人ならざる宗教家によつて傳道せられても、眞の信者は出來るものでない。若し出來得たこすれば、それは信者が人格化されたる聖價值に直參したものである。これらの文化價值は、ヤハリこれらの個性の彼方にあるものにして、従つて學校に於ては生徒はその教師の人格を通ぜずして、直ちに價值へ直面し得るものである。但し現實に於ては、個性者は又人格體であるから、右の如き抽象理論のみが純粹に作用してゐることは殆んどない。何等かの程度に於て、人格を通じて諸文化價值の傳達は、行はれてゐるのであるが、それは飽くまでも價值本來の必然的條件として、人格を通ずるのでなく、偶々その傳達者が人格體なるが故に起る現象である。従つて宗教の世界に於ける師と其の弟子、即ちその信者と其の間に於ける人格的接觸感化とは、同一の範疇に入れることは出來ない。約言すれば、學問其他が取扱はるゝ教育の世界に於ては、價值そのものが、主要地位を占むるものである。而してその價值の傳達によつて、人格の陶冶が行はるゝのであるが、宗教の世界に於ては、人間の本質たる人格が主要地位を占むるのである。従つて、聖價值も人格を通ぜざる場合には、宗教も一の理論と化してしまふものである。かくて宗教に於ては人格を通ずることによつて、聖價值は崇高なる尊嚴性を發現するに至る。従つて宗教に於ては、拜むことを必然的に要求するが、學問等の世界に於ては、これを要求せない。これ價值を人格化するにせざるこの差異によるものにして、宗教に於て、教祖宗祖派祖の人格的感化力の偉大なるを見れば、此理の存在することに充分である。かくて宗教を離れたる學問等は、人格を本質的には必要とせない。然るに、人間は凡べて人格體である。而も人格體として生活を営むものである。故に教育に於ても、最終の目的はこの人格の陶冶にあることは前述の如くである。然らばいかに生命の屬性たる知情意等の陶冶を以て、現實的なる教育の状態なりとは云へ、それが人格の陶冶にまで及ばざる時は、眞の教育的任務を果し得たとは云ひ得ないのである。茲に於て宗教的陶冶を換言すれば、人格的なる感化を必要とす。

かく考へ来るに、宗教的陶冶を離れては、本來教育はあり得ないのである。唯だ宗派教派の差異による、争闘から来る混亂を懼れて、教育より宗教を形式的にも實質的にも排斥せんとしたことが、既に大なる矛盾であり又無理なることである。茲に變態的な本質的使命を忘れたる教育が、行はるゝに至つたものである。要するに教育作用は宗教的なる師弟の結合關係に俟たざれば、眞の人格陶冶は不可能である。

註一、教育的價値に關しては、これを教育の理想の方面に、兒童の心理的特異性即ち個性の兩方面より考察せねばならぬ。こゝ論を俟たい。而して一般に前者の立場に立つものは獨乙の學者デュール(Duhr)を以て代表し得の價値説である、又後者の立場に立つものは米國の學者デューエ(Dewey)を以て代表し得である。

註二、ワグナー(Wagner)は價値を宗教的、道德的、美的論理的、實用的、快樂的の六種に分ち而も、これらを平等の資格に説くが、ペスタロッチー(Pestalozzi)は、これに反して「人間の悟性は神の愛を通じてのみ不滅の本質の悟性となる」(Neujahrrede) (1181) 云つて宗教的價値の一層高次的なることを説く。シュプランガー(Sprang)等の文化教育學者は後者の説を持す。(Lebensformen)

註三、慧苑音義卷上に「般利は普なり、究竟なり、涅は出離なり、般那は煩惱結なり云云、諸の煩惱結を普く究竟じて出離するなり」又慧遠は「般は入、涅槃は滅、那は息なり、妄を息めて眞に歸するは入、生死を滅して寂滅に入るは滅、解脱を究竟じて永く蘇息するは息也」(望月、佛教大辭典、涅槃)

註四、例へば宗祖法然上人に對する二祖鎮西上人の言葉及び態度に於て充分に察知することが出来る。(勅傳四十六その他)

(附言) 以上は聖價値を中心として、宗教々育に關する一端の問題に就ての簡見である。更に論證の必要もあり、且つ特に佛典により論證せんことを考へしものなるが、研究の未熟に、時日の不足の爲に、これを一切省略せしことは誠に遺憾であるが、後日を期して更に大方の叱正を乞はん。